

書かれた「この地」を読む

📖みのかもブックマーク

に開化したりとて、一同袖手の足輕く、間も無く新加納に着きぬ。時に天心君のいふ、今朝の啓行に鶏の啼いたのが目出度い、啓行も音で讀めば啓行、鶏口となるも牛後となるなの例へもあれば、今度の旅を五鶏行と名づけては何うか、鳥の啼く東男、兎角鶏には御親類筋なればとて、その身は先づ錦鶏と呼び、玉章君は烏骨鶏、宗山君は野鶏、劍池君は鷺むしやなれば軍鶏と名乗を揚げ、僕は夜陰に戸を叩きたる例もあればとて、水鶏とこそは命名したり。さる程にこの五人、如何なる事かなす、そは次を讀め。

太田の渡

野鷄子と僕とは、岐阜にて盲目縞の脚絆を買ひたれば、毛脛だけは隠

七十五 渡 の 田 太

れたれど、木曾の驛路六十九次を、股にかけて、テクラうといふ蒙の者が、黒の山高朝も似合しからず、雅にして何かお徳用向の笠もがなと、新加納の町に入りて、荒物屋の店を窺へば、名物の檜木笠あり、これさ〜と名々ツツ、を手にし、古手拭を引裂きて、紐に捻りて結びつけ、阿彌陀に被りて、この町を出でぬ、手力雄の社を通り過ぐれば、村あり、松原あり、稻葉山は次第に遠くなりて、前には廣き野の横はれり、並木の松を分けて、一路砥の如く平かなれば、落葉拾ふ童の、大熊手引ッ擔ぎ、鼻唄うたひながら行き過ぐるを呼び止め、鞆沼まで幾里あるかと問へば、未だ二里に遠しといふ、時は十時を過ぎたり、物欲しき頃なれば、飯賣る家も無きやと問ひ返すに、この原が三里あり、茶を飲む店もあるまじとて、松原の小徑を横に外れ、松の露やら涙やらと、土地訛の鈍聲振絞つて唄ひつ、姿は木の下蔭に隠れ

▲「千山萬水」より「太田の渡」(国立国会図書館デジタルコレクションより)



▲太田の渡し場跡

おおはしおとわ
大橋乙羽(1869-1901)

明治期の編集者・小説家で、本名は又太郎。山形県出身で、出版社「東陽堂」「博文館」に勤め、明治の文豪の多くの作品を世に送り出した。文学者に限らず美術家、政治家との交流も深かった。

📖みのかも文化の森 ☎28-1110

明治時代の中山道の道中記『千山萬水』

明治時代に書かれた中山道の道中記として、編集者で作家の大橋乙羽(1869-1901年)の著書『千山萬水(明治32年刊・博文館)』に収録された「木曾五鶏行」「太田の渡」の二篇を紹介します。

乙羽と共に中山道を歩いたのは、急速に西洋化していく明治時代に日本美術の保護と革新を試みた美術運動家の岡倉天心をはじめ、日本画家の川端玉章や寺崎広業(宗山)、剣持忠四郎の4人です。

岐阜市の玉井屋で落ち合った5人は出発の朝、鶏の声で目覚めます。これに縁起を担いだ天心は自ら錦鶏を名乗り、他4人も軍鶏や烏骨鶏になぞらえ、この旅を「五鶏行」と名付けます。

一行は新加納で檜木笠を買ひ、時折句作を交え、景色や名物を楽しみつつ道を進みます。鞆沼からの道中で見た木曾川の景勝と川下りの様子も描写されています。夕方、太田から舟で今渡へ渡った一行はうどんを食べ、人力車で御嵩の宿まで行きました。

テンポのよい乙羽の文体は、旅の楽しさと中山道の当時の様子を生き生きと伝えていきます。